

プロジェクト課題活動実績

課題名：需要に応える農産物の生産振興と産地育成

岩国農林水産事務所農業部 チーム員：増富和恵、吉賀千歌子、河村佳枝、
杉富士子、棟居信一、木村拓哉、
陶山紀江、青木博幸

<活動事例の要旨>

岩国地域の生産を担う新たな人の確保・育成に向けて、「確保・育成体系」を整理し、関係機関との協議、役割分担を行った。

また、JA直売所の売上5億円達成に向けた出荷量拡大のしくみづくりや、共販品目を中心とした産地育成に向けて取組を強化した。

1 普及活動の課題・目標

岩国地域では、農業者の高齢化等により、平成22年から平成27年にかけて農業就業人口が22%、経営耕地面積が13%減少している。

このような中、平成30年3月に農業振興の拠点として「FAM'Sキッチンいわくに」（以下、「JA直売所」という。）が設置され、出荷会員数、販売額ともに着実に伸びている。しかし、目標の販売額5億円を達成し、かつ継続していくには、新たな出荷者の確保・育成と、さらなる出荷量の拡大や販売強化が必須である。

一方、市場出荷が中心のJA共販については、営農塾等により新規栽培者が確保されている品目もあるが、それ以上に高齢化で出荷者が減少し、市場等の需要に応えられていない。また、70代以上が中心となっている部会も多く、今後、さらに部会員や出荷量の急激な減少により、産地の維持も懸念される。

そこで、生産を担う新たな人の確保・育成により、JA直売所や市場の需要に応える農産物の生産を拡大し、産地の育成を図る。

2 普及活動の内容

(1) 生産を担う新たな人の確保・育成

- ・人の掘り起こし・育成方法について、これまでの取組を含め「確保・育成体系」として整理した。これを基に、関係機関と確保・育成の方針、役割分担を協議した。
- ・農業初心者用の研修として新たに位置づけた「お試し研修」は、令和3年度に「野菜栽培チャレンジ研修会」として実施した。
- ・平成29年から開始した入門塾（野菜）は、野菜栽培チャレンジ研修会と交互に、隔年で開催することとし、主催者側の負担を軽減しつつも、充実したカリキュラムとなるよう見直しを行った。
- ・りんどうは、令和3年度から新規栽培者を対象とした栽培講座を開始した。

(2) 出荷量拡大や販売強化等によるJA直売所の売上向上

- ・「5億円達成に向けたパワーアップ会議」は毎月開催し、野菜や加工品出荷者の出荷量拡大、さらに意欲ある出荷者をフォローするしくみを検討した。
- ・野菜出荷者の出荷量拡大については、時期別の作付けを推進する配布資料「作付けの手引き」の作成と、栽培講習会の開催を支援した。栽培講習会は、令和3年

- 度はコロナ禍のため実施できなかったが、令和4年度は6月と1月の2回、農薬適正使用講習と併せて実施した。講習会では、販売実績等から重点推進する14品目を選定し、山間地用と中山間～沿岸部用の作付体系例を示して推進した。
- ・加工品出荷者に対しては、今まで試行したJA直売所での贈答用商品販売をステップアップし、令和3年度からは、夏ギフトと冬ギフトの本格的な販売に向けて支援した。また、贈答用商品づくりの留意点や写真の撮り方、効果的な情報発信の方法を学ぶための研修会を実施した。
 - ・意欲ある野菜出荷者のフォローアップに向け、しくみづくりに取り組んだ。令和3年度は、前年度に選定した育成モデル農家2戸を対象に、現状と課題を整理し、巡回指導などJAと農業部が連携して効果的なフォローアップ体制や手法を検討した。次に、JA直売所販売額の目標達成に向けて育成したい出荷者の姿を明確にするため、出荷者の販売品目や金額、年齢等を整理し、さらに毎年実施している出荷者アンケート結果等も含めて検討した。令和4年度は、育成対象者を8人选定し、JAが中心となったフォローアップを行った。
 - ・意欲ある加工品出荷者2グループを支援対象とし、JA直売所との意見交換を実施した。直売所の需要がある品目や、出荷者サイドで増量可能な品目、対応可能な曜日等について意見交換を行った。これを基に、グループは出荷量拡大や製造体制について検討することができた。
 - ・食育キッチンにおける体験交流の運用等について検討した。令和4年度からは、JAが主導して調整会議を行い、JA女性部や青壮年部、生改連の事務局が企画を持ち寄って実施方法の検討や情報交換等を行った。

(3) 市場の需要に応える産地の育成

ア 共販品目の重点化、新規品目の選定と生産力の向上

- ・共販品目の重点化として、わさび、くり、りんどう、夏秋トマトに、令和3年度の単県事業を活用して施設導入した新規品目のアスパラガスを加えた5品目について、産地育成を図った。

(ア) わさび

- ・農林総合技術センターとの連携により、良質な超促成苗の生産試験を実施した。また、わさびと組み合わせる品目として、きゅうり、ミニトマトを選定し、実証ほの設置により課題を抽出した。
- ・花わさびの出荷については、従来、京阪神への出荷が主体であったが、地元への販売を検討した。また、品質低下の防止や後作へのスムーズな移行等のため、加工用（茎葉）出荷開始時期の前進化について検討した。

(イ) くり

- ・美和地区において、カットバック労力補完体制整備に向け、講習会の実施や改植の推進を図った。また、ヨウ化メチル燻蒸処理の代替方法の試験や、追肥の労力軽減に向けた緩効性肥料の施肥試験を実施した。

(ウ) りんどう

- ・令和3年度から新規栽培者の育成と確保を目的にりんどう栽培講座を開始した。
- ・既存生産者に対しては、中生や晩生種等、新たな作型や品種構成の提案を行い、規模拡大への誘導を図った。
- ・地域にあった品種の選定や遮光技術の実施について実証ほを設置し、部会で検討した。

- ・令和4年度は、やまぐちオリジナルりんどうの盆出荷を目的に、摘心栽培実証ほを設置した。
 - ・販路拡大に向け、市場の聞き取りを行い、販売先を検討した。
- (エ) 新規品目の選定と生産拠点等の導入
- ・令和3年度は、新規品目としてアスパラガスに取り組むことになり、新規就業者等産地拡大促進事業を活用した栽培施設の導入について、仕様の検討等を支援するとともに、施設設置前の排水対策や定植に向けた準備等を指導した。令和5年度は、わさびの施設整備に取り組むことになり、具体的な事業内容を協議した。
- (オ) 夏秋トマト
- ・単収向上に向けた栽培検討会の開催と巡回指導を行った。また、荷姿の変更や出荷先について検討を行った。
- (カ) アスパラガス
- ・アスパラガスの栽培を開始した3戸に対し、栽培技術の確立に向け、栽培管理の巡回指導や講習会を行った。また、出荷先や出荷基準等に係るルールの検討を行った。
- イ 給食出荷に向けた生産体制の整備と生産量の拡大
- (ア) 給食出荷に向けた生産体制の整備と生産量の拡大
- ・給食用野菜について、対象品目の生産計画から出荷計画、納入実績など、納入までの工程を確認した。また、JAの給食部会設立に向け、課題の整理を行った。
 - ・新たにハクサイの生産から納入までの試行を行った。
- (イ) タマネギの生産出荷計画の作成・見直し
- ・タマネギ大規模農家等への栽培面積の拡大推進、排水対策、適期管理に向け重点巡回指導を行った。また、新規栽培者を確保するため、関係機関や部会員からの声掛け等により勧誘を行った。

3 普及活動の成果

(1) 生産を担う新たな人の確保・育成

- ・関係機関で確保・育成の方針と体系が合意され、連携して実践することができた。
- ・「野菜栽培チャレンジ研修会」は、販売目的で生産を開始する人材を掘り起し、確保する場とし育成体系の入口として位置づけた。参加者のうち3名が令和4年度入門塾（野菜）を受講、1名が直売所への出荷を開始した。
- ・「入門塾（野菜）」は、令和4年度は16名が受講し、次世代を担う若い人や、新たな考え方を持った人など幅広い人材の掘り起こしができた。開催にあたっては、関係機関が連携して実施できた。
- ・令和3年度は、「わさび営農塾」を受講した6名のうち、3名が部会に加入し、残りの3名もわさび栽培を開始した。令和4年度は、9名が受講した。また、「くり営農塾」は、令和3年は7名が受講、令和4年度は10名が受講した。
- ・りんどうは、栽培講座を令和3年度に1名が受講し、令和4年度も1名が受講中で、新規栽培者の確保・育成ができた。
- ・JA直売所では、出荷者募集、出荷者講習会、意欲ある野菜や加工品出荷者へのフォローアップ体制ができつつある。

(2) 出荷量拡大や販売強化等による J A 直売所の売上向上

- ・時期別の作付け推進のために作成した「作付けの手引き」は、品目の紹介を中心としたものから、栽培のワンポイントアドバイスなど出荷者が活用しやすいよう内容を見直した。今後、出荷者の反応を確認して、バージョンアップしていくこととした。
- ・加工品出荷者に対しては、常温商品だけでなく冷蔵商品も取扱う販売体を整備し、取扱商品も増加する等、贈答用商品の販売に向けたしくみが整った。
- ・意欲ある野菜出荷者へのフォローアップに向け、モデル農家を設定し、巡回指導を行った。この結果を基に、フォローアップする対象者や人数、指導体制、内容、育成方法について検討することができた。令和4年度には、育成対象者の意向把握を中心に、J A 主体でのフォローアップ活動がスタートした。
- ・意欲ある加工品出荷者として位置づけた2グループでは、出荷量が増加し、売上増につながった。
- ・食育キッチンにおける体験交流の運用を見直し、J A が主体的に調整会議を行えるようになった。また、J A 女性部や青壮年部も体験交流を企画して、生改連事務局を含めた情報交換ができるようになった。

(2) 市場の需要に応える産地の育成

ア 共販品目の重点化、新規品目の選定と生産力の向上

(ア) わさび

- ・良質な超促成苗の生産試験により、夏越し株率の向上等の成果が得られた。
- ・複合経営品目として、きゅうり及びミニトマトの有用性を確認できた。

(イ) くり

- ・カットバック労力補完体整備のため講習会を開催し、美和地区で栗剪定士を5名育成することができた。剪定士によるカットバックが3件・1ha実施された。また、2経営体が50aの改植を実施した。
- ・貯蔵技術として、ヨウ化メチル燻蒸処理の代替技術である蒸熱処理の試験を実施した結果、処理機械や既存の燻蒸施設の一部改修が必要なことが分かった。

(ウ) りんどう

- ・新規栽培者の確保・育成を目的として実施したりんどう栽培講座に合計2名が参加した。
- ・既存生産者に対して、新たな作型や品種構成の提案を行った結果、令和3年度は1名、令和4年度は2名が新たな作型を導入した。
- ・販路については、県外への販路拡大は当面見合わせ、一定の面積が確保されるまでは作型分散を図りつつ、県内市場へ出荷することとした。

(エ) 新規品目の選定と生産拠点等の導入

- ・アスパラガスのハウス11.4aが整備され、新規に栽培に取り組む農家3戸が令和4年から栽培を開始した。
- ・令和5年度わさび栽培ハウス導入希望者のハウス設置場所や規模等について協議し、令和5年度にハウスを整備することになった。

(オ) 夏秋トマト

- ・平均単収は病害虫等により前年並みとなったが、栽培技術は向上しつつあり、次期作に向けた個別の課題と対策が整理された。

(カ) アスパラガス

- ・3戸が新規に栽培を開始した。今後、植物の生理生態への理解促進と早期技術習得、他の作物との作業の競合を考慮した栽培管理体系の検討が必要であることが分かった。

イ 給食出荷に向けた生産体制の整備と生産量の拡大

(ア) 給食出荷に向けた生産体制の整備と生産量の拡大

- ・対象品目の生産計画から出荷計画、納入までの工程を確認し、課題が整理できた。試行の結果、新たな対象品目として、ハクサイに取り組むことになった。

(イ) タマネギの生産出荷計画の作成・見直し

- ・勧誘により新たに8戸の栽培者を確保し、面積は70a増加した。8戸のうち1戸は10a以上の面積で栽培を開始した。面積拡大に伴い生産出荷計画を作成し、計画達成のため、重点的に育苗や定植、病害虫防除等の指導を行い、適期作業を実施することができた。

4 今後の普及活動に向けて

(1) 生産を担う新たな人の確保・育成

- ・作成した「確保・育成体系」をもとに、これから農業を始める人に向けた「野菜栽培チャレンジ研修会」や「入門塾（野菜）」の開催により、継続した掘り起こしや育成に取り組む。JA直売所では、出荷者募集や講習会、意欲ある出荷者へのフォローアップを行う。

(2) 出荷量拡大や販売強化等によるJA直売所の売上向上

- ・「作付けの手引き」は、出荷者の意見を踏まえた内容に変更しつつ、講習会とあわせて活用する。
- ・加工品出荷者の出荷量拡大に向けた取組では、残された課題である魅力ある商品づくりについて、研修会等の開催を通じてフォローアップする。
- ・意欲ある野菜出荷者へのフォローアップやステップアップ支援については、JA営農指導員を主体としながら連携して進める。
- ・意欲ある加工品出荷者の支援は、必要に応じてJA直売所や出荷者同士の意見交換を行い、加工品出荷者が主体となった販売促進等を誘導する。
- ・JA主体の調整会議を継続して開催できるように支援すると共に、各組織の体験交流企画や運営を支援する。

(3) 市場の需要に応える産地の育成

ア 共販品目の重点化、新規品目の選定と生産力の向上

(ア) わさび

- ・農林総合技術センターと連携し、良質な超促成苗の生産に向けた技術を確立し、超促成苗の供給体制整備に向けた課題を抽出する。また、茎葉の増収に向けた栽培技術の再構築を図る。さらに、わさび新規栽培者の早期経営安定とわさび生産者の所得向上を目的とし、技術習得支援と複合経営モデル案の作成を行う。

(イ) くり

- ・美和地区でのカットバックの労力補完体制を充実させ、国庫事業を活用した改植を推進する。また、農林総合技術センターと連携し、ヨウ化メチル燻蒸

処理の代替技術である蒸熱処理の導入について支援する。

(ウ) りんどう

- ・新規栽培者の育成・確保を進めるとともに、既存生産者の規模拡大、安定生産技術の確立に向け、定期的な巡回を実施し、技術指導を行う。また、販売戦略について部会で検討を行う。

(エ) 新規品目の選定と生産拠点等の導入

- ・産地の育成・拡大に向けて生産拠点施設等の事業導入を支援する。

(オ) 夏秋トマト

- ・引き続き、栽培検討会や巡回を実施し、栽培技術の向上を図る。

(カ) アスパラガス

- ・栽培講習会や定期的な巡回を実施し、新規栽培者3戸の早期技術習得を支援する。

イ 給食出荷に向けた生産体制の整備と生産量の拡大

(ア) 給食出荷に向けた生産体制の整備と生産量の拡大

- ・JA給食部会設立に向けた支援を行う。

(イ) タマネギの出荷計画の作成・見直し

- ・引き続き、大規模農家等の規模拡大や新規栽培者の確保に努める。ポイントを絞った巡回指導の実施による安定生産と出荷量拡大を図る。

【取組実績】

目標項目	基準年 2020年	現状 2021年	目標 2022年	実績 2022年度末
農産物直売所販売額（千円）	442,380	472,167	500,000	436,148 (R5.2現在)
出荷会員数（人）	404	448	500	485 (R5.2現在)
生産拠点施設面積（a）	85	96.4	100	96.4
わさび営農塾生（人／年）	0	6	3	9
くり共販出荷量（t）	37	10	60	10.2
りんどう新規作付面積（a）	—	6	12	13



「入門塾（野菜）」の定植実習



りんどう栽培講座定植準備研修



アスパラガス巡回



写真の撮り方や発信方法を学ぶ研修会